

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 文 智恩 (MOON, Jieun)

論 文 題 目 20世紀前半における韓国・群山の市街地形成に関する  
研究 (A study on the urban formation of Gunsan in Korea in the first  
half of the 20th century)

### 論文審査担当者

主 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教授 西澤 泰彦

副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教授 片木 篤

副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 准教授 宮脇 勝

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、韓国西海岸の港湾都市である群山において 20 世紀前半に展開した市街地形成を対象に、特に、開港を契機に設定された各国居留地の建設方針と建設実態、植民地化に伴う居留地撤廃と植民地行政確立の中での市街地建設の過程と特徴、植民地支配下での法定都市計画（市街地計画）の特徴を明らかにしながら、約半世紀にわたる群山の市街地形成の全体像を示したものである。

論文は 5 章から構成されている。第 1 章では、既往研究の分析を通して、その多くが日韓併合後も居留地が存在していたことを無視し、また、根拠を示すことなく朝鮮総督府が各地の市街地計画を一元的に決定していたとすることを示し、既往研究の問題点を指摘した。

第 2 章では、群山各国居留地について、外交文書などの文献資料を基にその設定経過と建設方針を明らかにし、さらに、土地の競売に関する情報を基に市街地建設の実態を把握した。その結果、港湾建設の遅れと居留地の南西に位置する既存の城壁都市沃溝や近隣の既存韓国人集落との連絡の必要により、港のある錦江河畔から内陸に向けて市街地建設が進んだことを明らかにした。また、日韓併合後も 1914 年まで居留地は存続し、この間も市街地建設が進められていたことも明らかになった。

第 3 章では、居留地撤廃後から 1930 年代半ばまでを対象として、地方行政機関（群山府）の確立に伴う市街地建設を論じた。そして、全羅北道の中心都市全州と群山とを直接結ぶ全群街道の設定や朝鮮鉄道群山線の建設に伴い、旧居留地東側・南東側に存在した既存集落を取り込みながら新市街地が形成されたことを示した。

第 4 章では、植民地支配下での法定都市計画である群山市街地計画の策定過程と計画の特徴を論じた。1938 年告示の群山市街地計画は、1936 年 5 月に群山府が作成した計画図に示された広大な工業用地の設定とそれに見合う鉄道、運河、港湾施設の整備計画、その後におこなわれた群山府会と朝鮮総督府技師との間での意見交換の内容が反映された計画であった。その結果、朝鮮総督府が一元的に各地の市街地計画を決定したという既往研究の指摘を否定し、また、群山市街地計画が広大な工業用地を確保する計画であったことを明らかにした。

第 5 章は、本論文の結論である。群山は 20 世紀前半にわたって港湾都市としての性格を有しながら、各国居留地会による居留地建設を起源に、群山府による市街地建設、群山市街地計画の策定を通して、内陸部にある既存集落を取り込みながら市街地を拡張させることで都市の規模拡大を図ったことが明らかになった。

本論文は、植民地期における市街地建設と鉄道、港湾の建設主体の関係についての論考に不十分なところは存在するものの、居留地を市街地形成の起源とした韓国の地方都市における市街地形成の過程を示したという点において、都市史・建築史研究の新たな方向性を示し、建築学の発展に大きく寄与した。よって、本論文の提出者文智恩さんには博士（建築学）の学位を授与される資格があるものと判定した。